中等科・高等科・最高学部

クリスマス音楽会　2000 年以降各部の歩みを振り返りつつ

武田若菜　佐々木順子

自由学園にとって皆で演奏をする意味とは何なのか？コロナ禍を経てますます加速する個別化。4 年に 1 度行われてきた大きな演奏会場での音楽会は第 31 回（2018 年 11 月）をもって事実上行えない状況となり、学校全体としては 12 月に行うクリスマス音楽会が唯一の音楽会となって 6 年目を迎える。中等科以上が全員で演奏し聞き合うこの演奏会の教育的な意味を検証しつつ、クリスマス音楽会に向かう各部の取り組みを振り返りたい

Ⅰ.2000 年以降の音楽教育の経緯

23 年前、武田が赴任した頃の男子部音楽授業ではピアノの前で歌っている生徒は 5, 6 人であり、アシスタント教員であった私は、周囲で好き勝手に動き回っている生徒に働きかけ座らせることに終始した日々を思い出す。その頃は中等科の曲、高等科の曲を選曲してクリスマス音楽会に歌っていた。

2年後、男子部全体で教科教育の本気な立て直しが始まり、特に問題が大きかった音楽科は 6 学年全員でメドレー曲集を仕上げることをきっかけに、翌年からは全員で同じ曲に取り組むことに挑戦し、教育的な手応えを得る。

とはいえ中高で同じ曲を学ぶことには音取りから四苦八苦の連続であり、1 学期を終えても音取りが主な授業内容であり、授業中座っている生徒が多くはなったものの主体的に取り組んでいる生徒は一握りであった。

それでも永年男子部で教えておられる羽山晃生先生が熱心に発声指導を行い、指導を受けた生徒が首に青筋を立てながら必死に歌う様子、声が太くなっていく様子には徐々に生徒たちも興味を見せ始めた。そのアシストとして 3 学期にはアンサンブルコンテスト、独唱コンテストを行事に組み入れ、毎年、優勝する生徒やクラスに手製のケーキを商品として渡すなど歌うことにスポットライトが当たるような工夫をした。

そうしているうちに、第 30 回目の 4 年に一度の音楽会を迎え（2014 年度）、その前の年から指揮者の梅田俊明先生からコーラス全体のレベルアップのために全員の核となるコーラスグループを作ることをご提案いただき活動が始まっていたため、4 年に一度行われる芸術劇場での演奏会は、第 29 回よりも質の高いものになっていた。

その演奏会後高等科 2 年生の男子生徒から男声合唱を授業だけでなくもっと深めたいとの意見が出て、グリークラブが 2015 年に発足する。コンクールを目指したいとの希望もあり、実現させる取り組みが始まる。このグリーのコンクール出場は初年度「鷗」で出場し、丸坊主の男子生徒たちが 34 名で歌う姿も清々しいさも手伝い銅賞をいただくことができた。しかし翌年からは寮生活と練習時間帯を巡り折り合いがつかず、練習時間も少なくなり盛り上がりを欠いてゆく。コロナ禍 1 年目には永年学園にご尽力くださった羽山先生も夏休み中にお引きになり、合唱の灯は消えかかったが当時の団長と副団長の英断によりこの年もコンクールに出場する。しかしコロナの影響は大変大きく、礼拝の讃美歌も歌えない、クリスマス音楽会も演目ごとに歌っている映像を録画して繋いだものを皆で見るスタイルになる、また、一番ひどい時には、全員マスクをして歌うことはおろか、発音を許されずハミングで歌ったものを録画するということもあった。

2022 年度 5 人になったグリーのメンバーと満を持して、高等科 2 年生のクラスでコンクールに出ることを考えた。授業の中で音取りをし、クラスみんなでハーモニーを楽しめるよう質の高い授業展開を試みた。音程がなかなか取れない、俗にいう音楽が苦手な生徒、音色が他人と混ざり合いにくい人、リズムの遅れる人などは、肩身の狭い思いをしがちである。最終的に有志が出ることとなったが、この取り組みを通して、より良い音程と響きを目指していたときに、できない生徒が責められるのではなく、頑張っていることを称賛する団体へと変わっていった様に目を見張った。それは高い目標に対して、それぞれが課題を持ち努力していたからだと考える。結果は銅賞。クラス授業と解散後、自主性

に任され集まってくる生徒との発声練習と音取りが主な練習であり、全員で合わせられたのは夏休み最後の 4 日間だけであった。

翌年に当たる今年、2023 年度は中 1 から高 3 までの有志で構成され、高等科は新カリキュラムに移行したことで更に練習時間が前年度よりも減った。音色の統制についても異年齢では変声期などがあり限界がある。しかし男子部最後の年に自由学園男子部としてコンクールに出場できたことには意味があった。全学年が「今年」に取り組み、それぞれの年齢に応じて詩を味わい表現へと繋げていった。コンクールに出ない生徒たちも、各クラスにいるコンクール出場のために必死で練習した生徒達の影響を受け、クリスマス音楽会の 2 日前から始まった合同練習では、全員が真剣そのものの眼差しで指揮者と共に意欲的な演奏を披露することができた。

以上は主に男子部で見えたことであったが、女子部も 2015 年に女声合唱としてコアグループが活動を始めた。コアグループは、学内での行事や野の花祭などで発表を行った。3 年後の 2018 年にグリークラブの活動に刺激を受け、東京都合唱連盟のコンクールに初参加。以来、コロナ禍で参加できなかった年を除き、コンクールという舞台で合唱するのは当たり前のことになった。今年は女子部のために特別に作曲していただいた曲に自分達の想いを乗せて美しいハーモニーを響かせていた。

Ⅱ、当日の演奏

2023 年度のクリスマス音楽会は、12 月 20 日に記念講堂で行った。10 時 40 分、男子部委員長の挨拶から会が始まり、既にスタンバイしていたウィンドオーケストラの演奏が始まった。プログラムは別途添付とするが、今まで聞いたことのない力強いサウンドと生命の鼓動を感じさせるリズムとに圧倒される演奏であった。ウィンドウオーケストラ部も部員の減少に苦しみ、練習時間の確保もままならぬ中、この演奏のためにどれだけ佐伯正則先生が悩まれ工夫を重ねられたことか、頭の下がる思いで聴かせて頂いた。

ウィンドオーケストラ

学部の演奏は、今年初めてコンクールに出場するにあたり、男子の出場者が足りなくて苦労した分、落ち着きがあり大人の演奏であることが上品なハーモニーからも伺えた。

最高学部

来年度共学化することを踏まえ、中等科 1 年生によるウクレレ演奏は、男女別々に練習してきたクリスマスの讃美歌を相手のクラスに歌ってもらうスタイルをとった。前日までに双方のクラスで合わせる時間が 2 日間に各 10 分しかなく、大変危ぶまれたが、女子の仕上がりの良さを見た男子部 1 年生がクラスの時間で自主的に練習したことが実り、当日は揃って弾けていた。達成感を味わえたとの感想が多く寄せられた。

女子部・男子部中等科１年

グリーとコアの演奏も今年が最後となることから、男子部のグリークラブは１年生から６年生までの５人による無伴奏のアンサンブルに挑み、少数の挑戦に対して温かな拍手が贈られていた。女子部のコアグループは、コンクールの課題曲の「サンクトゥス」を 17人で、無伴奏で歌った。1学期から練習は行っていたが音が取りにくく、ハーモニーがなかなか決まらずに苦労した。しかし、さすがにコンクールの舞台を経験しただけであって、美しいハーモニーが会場に満ちていた。

グリークラブ

コアグループ

1部の最後は弦楽オーケストラによる演奏。昨年度末で梅田先生がお引きになられてから浅野真知子先生、波多野せい先生を中心に活動を行ってきたが、梅田先生が良くおっしゃっていた指揮者の指示を待つのではなく自分たちからアンサンブルを楽しむ精神が受け継がれ、聴く者の心を楽しませた演奏であった。

弦楽オーケストラ

第２部は各部の最後の合唱をじっくりお聞きいただけるような構成にした。

先ずは女子部。中等科コーラスでは 100 名の生徒たちが「わたしをお使いください」を、心を込めて懸命に歌う姿を見ることができた。

女子部中等科

続く６学年のコーラスでは指揮の永野馨先生の大学時代の同級生で作曲家である町田育弥氏が女子部生徒たちのために作曲された「風のように」(作詞　新沢としひこ氏)を歌った。私たちのために作曲してくださったのは大変光栄なことであるが、当然のことながらお手本にするものは何もなく、教師も含めて音取りの段階から手探りで行った。町田先生に学校においでいただき、この曲を作られた思いを語っていただいたり、実際の演奏に対してアドバイスをいただき、それを取り入れることで演奏がどんどん変わっていく

ダイナミックな場面を経験することができた。生徒たちは「私たちのために作ってくださった曲」として親しみを感じ、作詞者、作曲者の思いに自分たちの心情を重ね合わせて表現するという、またとない貴重な学びの機会を得ることができた。

女子部中等科・高等科

次は男子部。男子部は中等科と「鷗」を、男子部 6 学年で歌う曲には「今年」を選んだ。戦争が世界の各地で起こり、日本も他人事ではいられない緊張感を感じる昨今、戦争を起こしてはいけないと心底思える感性を歌うことを通して得てほしいと願い中等科には「鷗」を歌ってもらった。中学生が男声だけで 4 パートを受け持つこと、ハーモニーを作り上げていくことは至難の業である。

男子部中等科

中等科、高等科の 6 学年で歌う「今年」は音取りが難しく、以前は断念していた曲であった。谷川俊太郎さんの歌詞を味わうことも中等科生徒には難しくモチベーションが上がりにくかった。しかしセクションごとに音をとることができたら歌詞の意味を考えさせ、自ら詩の世界に入ってくれることを願った。徐々に谷川さんの言わんとすることが見えてくるとぐっと歌に力がこもった。この曲では「何でもない日常の有難さに心から感謝し、同時に未来にはどんな苦難があったとしても、踏み越えていける希望も君たちは持っている」と、とのメッセージを伝えた。この曲はクリスマス音楽会の前に、コンクールの自由曲としても歌った。異学年では達成できない音色の壁があったものの、それを超える思いの一致が迫力を生み敢闘賞をいただけた。クリスマス音楽会では男子部全員の思いとなり、男子部最期の合唱を終えた。

男子部中等科・高等科

プログラムの最後は、高等科以上の混声合唱。
「くちびるにうたを」は、世界的にこんな時期であり、男子部、女子部がなくなり新たな船出をする時代を生きていく生徒学生にエールを送る意味でこの選曲にした。かつてここまで全力で全員が歌ったことがあったであろうか。この年度が終わろうとしているときに、ある保護者から今年最高学年の生徒のお兄さんが初等部の 6 年生であったときに、当時4年に 1 度の音楽会でこの曲を高校生が歌っているのを見て、あの場であの歌を歌わせたいと思われたのだそうだ。期せずして弟さんが歌えて 感無量とのことだった。最期の曲を聴いて泣いてらっしゃる父母の方も多かったと聞いている。

最高学部・男子部女子部高等科

Ⅲ、おわりに

クリスマス音楽会の振り返りとして提出してもらった感想の中に次のようなものがあった。「昨年第九を歌うことが大変

だったので、また新たな曲に対してのモチベーションを立ち上げることは難しいと思った。しかし、第九に対しても初めから意欲的に取り組んでいたわけではなかったので、新しい曲に向き合ってみようと思って授業に臨んだ。授業を重ねるにつれて次第に「くちびるに歌を、心に太陽を持て」という歌詞に共感するようになり、本番ではみんなに交じって心から歌うことができた。私はどちらかと言うと歌うことが得意ではなかったが、今回は楽しく歌うことができ、少し自信を持つことができたように思う。」沢山の感想文が提出された。真剣に歌ってみると楽しくなったという感想が多かったのも嬉しいことであった。

今年は、それぞれの枠組みで合唱を中心とした音楽教育を行ってきた最後の年である。「協力を学ばせるなら合唱以外でもよいのでは」と言われたりもする。そうかもしれない。全員体操でもよい。寮生活でもよい。しかし音楽は目に見えない中で共働し 1 つのものを作り上げる。共同制作をして保存しておくことはできない。同じ演奏は二度とないのである。関わるものすべてが聴力とそのセンスを働かせ、何より心の耳で感じ取ったものを、将又、共に演奏するものと心の耳で共有し、練り上げていく。一人一人が持ち寄った努力を称賛し会い、その努力を少しも聞き漏らさず力としようとする集中力が音楽では培われるのである。そしてその輪の中で響きあえていることに喜びを見いだせるのである。真剣に向き合うことの楽しさを味わえるのである。もちろん合唱だけが音楽ではない。

しかし、生活を共にする仲間がいる学園生の場合、今年はどんな演奏が出来上がるか、その団体の集中力によるところであり、わくわくするものである。来年度からは共学化により混声のみのクリスマス音楽会になるのであろうか。新たな時代の合唱に、クリスマス音楽会の在り方に期待したい。

今回の音楽会が生徒たちの心に何かを残すものとなっていたら幸いである。

2023 年度クリスマス音楽会プログラム

2023 年クリスマス音楽会　プログラム

12 月 20 日(水)　10:40~12:20　記念講堂

1　ウィンドオーケストラ　ロマネスク　ジェイムズ・スウェアリンジェン
夢の星　ロバート・スミス
アフリカン・シンフォニー　ヴァン・マッコイ
指揮　佐伯正則

2　学部コーラス　花々と木々　サン・サーンス　指揮　永野馨

3　グリークラブ　ぜんぶ　さくらももこ作詞・相澤直人作曲
指揮　武田若菜

4　コアグループ　サンクトゥス　アンドレ・カブレ　指揮　永野馨

5　女子部・男子部中等科 1 年　ウクレレと歌　讃美歌 108 番 いざうたえ
讃美歌 103 番 まきびとひつじを
指揮　武田若菜

6　弦楽オーケストラ　ブルック グリーン組曲　G.ホルスト
人生のメリーゴーラウンド　久石譲

○

7 女子部中等科　わたしをお使いください　上村幸一郎作詞・作曲　指揮　永野馨
ピアノ　佐々木順子

8 女子部高等科・中等科　風のように　新沢としひこ作詞・町田育弥作曲　指揮　永野馨
ピアノ　佐々木順子

9 男子部中等科　鴎　三好達治作詞・木下牧子作曲　指揮　武田若菜

10 男子部高等科・中等科　今年　谷川俊太郎作詞・松下耕作曲　指揮　武田若菜
ピアノ　関口美彩江

11 最高学部・男子部女子部高等科　くちびるに歌を　フライシュレン作詞・信長貴富作曲
指揮　武田若菜
ピアノ　佐々木順子